

循環器疾患の救急治療

Emergency Care in Cardiovascular Diseases

第414回新潟医学会

日時 昭和60年12月14日(土)

会場 新潟大学医学部研究棟第二講義室

司会 山崎芳彦(第二外科)

演者 里方一郎(小児科), 竹内 衛(国立療養所新潟病院小児科), 宮村治男(第二外科), 山添 優(第一内科), 林 純一(第二外科), 寺島雅範(県立ガンセンター新潟病院外科), 遠藤 裕(麻酔科)

発言者 和泉 徹(第一内科), 相沢義房(第一内科), 荒井 裕(第一内科)

司会 それでは、これから循環器疾患の救急治療のシンポジウムを始めたいと思います。本日は、江口教授が司会をされる予定でしたが、胸部外科学会の重要な打ち合わせのため東京へ出張されており、出席できないということで、止むを得ず第二外科の山崎が代りをさせていただきますので、何かと不慣れなことが多いかと存じま

すがよろしく願います。循環器疾患の救急は、最近では茂野先生のことがご記憶に新しいかと存じますが、これから増々増加していくと言われておりまして、重要な問題となっております。季節柄、これから増える時期のような感が致します。循環器疾患の救急の実態をスライドでお示し致します。

1) 循環器疾患の救急治療

新潟大学第二外科 山崎 芳彦

いかなる疾患においても、心肺蘇生は、救命・救急の基本であり、然る後に原因治療のため然るべき病院へ搬送したり、専門医に依頼したりすることが多い。プライマリ・ケアとしての心肺蘇生は必須のものであるが、このような救急を要する疾患は循環器系疾患が多くを占めている。昭和59年の東京消防庁の統計によれば、心臓患者の救急車による搬送は、急病全体の6.5%で9,585人を

占め、狭心症3,056人、心不全2,694人、心筋梗塞2,111人、その他3,056人であったという¹⁾。しかも、全体の搬送数はこの数年変化は少いが、心疾患の占める割合は年々増加しているという¹⁾。これらの傾向は新潟市においてもほぼ同様であるということである²⁾。

救急治療を要することが多い疾患を表1に示すが、ほかに、外傷、肺塞栓症、人工弁機能不全、医源性のもの、

表1 救急治療を要する頻度の高い心血管疾患

1. 新生児、乳児心疾患 総肺静脈還流異常 大動脈縮窄症、大動脈弓離断症 肺動脈閉鎖症 その他チアノーゼ性心疾患 大血管転位症、三尖弁閉鎖症	急性心筋梗塞 心源性ショック 心室中隔穿孔 乳頭筋断裂 自由壁破裂
2. 後天性弁膜疾患 感染性心内膜炎 塞栓症をくり返す弁膜疾患 大きな左房粘液腫	4. 不整脈 完全房室ブロック、洞不全症候群 発作性頻拍症（上室性、心室性）
3. 虚血性心疾患 切迫心筋梗塞	5. 血管疾患 解離性大動脈瘤 急性動脈閉塞 破裂性大動脈瘤

いわゆるポックリ病などがあげられる。これらの救急治療にあたっては、内科、小児科、心臓血管外科、麻酔科などの連携プレーのみならず、各病院間のCCUネットワーク、Mobile CCU、救急患者の搬送システムなどの早い確立が望まれる。

参 考 文 献

1) 中根一徳：東京消防庁管下における心臓病患者の

取扱いと救命状況，治療，67：2091～2098，1985.

2) 救急統計：昭和59年，新潟市消防局。

司会 最初は、新生児期・乳児期における先天性心疾患の小児科的救急治療、診断面における進歩ということで、里方先生、お願いします。

2) 新生児、乳児期の先天性心疾患の救急治療

— 診断面の進歩を中心に —

新潟大学小児科 里方 一郎・竹内 衛・福島 英樹
立川総合病院小児科 竹内 則夫

緒 言

先天性心疾患の中で新生児、乳児期に症状を呈するものは重症なものが多く、救急治療を要することも多い。治療を適切に行うには、正確な診断をつけることが要求されるが、状態の悪い心疾患児には、侵襲のある検査は危険性が増す。この点、近年進歩した心エコー法は、非侵襲的であり、さらに、簡便、迅速に施行でき、重症度の高い新生児、乳児期の先天性心疾患の救急医療に大きな役割を果たすようになった。

われわれは、当科の成績を中心に新生児、乳児期の先天性心疾患の救急治療における診断面の現状について述べ、さらに、Balloon Atrioseptostomy (BAS) およびプロスタグランジンによる治療について検討した。

対 象

昭和58年5月より60年12月までに当科を受診した先天性心疾患児を対象とした。なお、BAS およびプロスタグランジンの成績については、57年5月より60年12月までの立川総合病院小児科の症例も加えて検討した。

成 績

1) 救急医療の現況

先天性心疾患の病型別頻度を表1に示した。VSDが最も多く、過半数をしめ、次いで、ASD, PS, T/F, ECDの順であった。

このうち、新生児、乳児期に救急治療を要した心疾患を表2に示した。症例は31例で、全先天性心疾患の約1